



「郷土が生んだ偉大な芸術家」といったフレーズは、よく耳にします。しかし、萩原朔太郎の場合は特別。彼を育てた前橋の風土と優れた詩を残したことは大きな関係があると、後世の研究でも考えられているからです。

郷土を題材にした多くの代表作

北曲輪町（現在の千代田町二丁目）に生まれ、学生時代などに何度か故郷を離れた時期があったものの、三十九歳まで前橋に住みながら中央詩壇で活躍。この間、代表作『月に吠える』『青猫』を出版し、『純情小曲集』も書き終えていたのです。その後、東京へ移ってからも、故郷の詩人たちに大きな影響を与え続けました。

また、代表作に郷土を題材にした詩が多いことも特徴です。「広瀬川」「才川町」「小出

前橋の風土が育てた 郷愁の詩人

新道「大渡橋」「新前橋駅」など、今でも本市に残る地名がそのまま題になっている詩もたくさん。故郷に対して、愛憎相半ばする心情が満ちあふれています。

故郷に対する複雑な感情

朔太郎の父・密蔵は大阪府の出身。東京大医学部を卒業後、群馬県立医院の医員になり、副院長などの要職を経てから開業しました。医師、人格ともに素晴らしく、人々から「生き神様」と尊敬され、患者の列が絶えなかったそうです。名家の長男で母や祖母から甘やかされて育ち、父からは大きな期待をかけられていた朔太郎は神経質で憶病な子どもに。成長しても学業に身が入らず、落第を重ね熊本県や岡山県の旧制高等学校を転々とした後に退学。医学の道に進まないばかりか、仕事にも

就かず、結婚してからも父親の金銭的支援なしには生活できない状態でした。こうしたことから本人は、郷土の人たちから「不肖の息子」と

親や郷土に反発しながら 40歳まで本市で暮らす

さげすまれ、ののしられていると思ひ込んでいました。上京してから故郷への懐かし

わが国の口語自由詩を確立させ、近代文学史に不滅の金字塔を残した偉大なる詩人。「水と緑と詩のまち前橋」を象徴する、萩原朔太郎の名を知らぬ人はいないでしょう。しかし、詩は難解だからと作品や功績、その人となりについては、よく知られていないようです。今年は生誕120年で多くの記念イベントも開催されました。この特集では本市が生んだ偉人の人間的な魅力を紹介。あなたも詩人・萩原朔太郎を育てた前橋の風土について考えてみませんか。

地域文化に大きな功績を

では、親の期待に反発しながら、青年・壮年期に何をしていたのでしょうか。

短歌や詩にのめり込む一方で、マンドリンに熱中し音楽家を目指していました。自らマンドリン楽団を組織。ステージでタクトを振りながら、楽譜を集めて編曲・作曲にも才能を発揮していました。主催したゴンドラ洋楽会は上毛マンドリン倶楽部へ発展し、県内各地に支部が設立。高崎マンドリン倶楽部の数人が、群馬交響楽団創設期のメンバーにもなりました。

朔太郎は故郷の異端者ではありましたが、決して孤立していたわけではありません。音楽仲間と広く付き合い、文学青年らと研究会や座談会を催し、文学・芸術について語り合いました。朔太郎は、前橋近隣はもちろん、県内の音楽・文学活動の高揚に寄与した「地方文化の功労者」として、顕彰されるべき大きな功績を残しているのです。

55年の生涯



一八八六（明治十九）年・0歳
父・密蔵と母・ケイの長男として生まれる

一九〇〇（同三十三）年・15歳
前橋中学（旧制）入学

一九〇三（同三十六）年・17歳
与謝野鉄幹が主宰する『明星』に短歌を投書し掲載

一九〇六（同三十九）年・20歳
前橋中学卒業

一九〇七（同四十）年・21歳
第五高等学校（熊本）入学

一九〇八（同四十二）年・22歳
同校一学年次を落第し退学。第六高等学校（岡山）入学

一九一〇（同四十三）年・24歳
第六高等学校を退学したと推定

一九一一（同四十四）年・25歳
マンドリンを習う

一九一二（同四十五）年・26歳
北原白秋が主宰する『朱鸞』に詩や短歌を投書

一九一三（大正二年）年・27歳
室生犀星と知り合う。『朱鸞』に六編の叙情詩が掲載

一九一五（同四年）年・29歳
「ゴンドラ洋楽会」を組織し指揮者となる

一九一七（同六年）年・31歳
詩集『月に吠える』を出版

一九一九（同八年）年・33歳
上田稲子と結婚

一九二三（同十二年）年・37歳
詩集『青猫』を出版

一九二五（同十四）年・40歳
妻子と上京し東京府下大井町に住む。詩集『純情小曲集』を刊行

一九二八（昭和三年）年・42歳
詩論集『詩の原理』を刊行

一九二九（同四年）年・43歳
妻稲子と離別し二児と帰郷。アフオリズム集『虚妄の正義』を刊行

一九三〇（同五年）年・44歳
父・密蔵死去。妹と上京

一九三一（同六年）年・45歳
東京府世田谷町下北沢に転居し母、妹、二児と住む

一九三三（同八年）年・47歳
同町の自分で設計した新居へ。雑誌『生理』創刊

一九三四（同九年）年・48歳
詩集『氷島』刊行。明治大講師になる

一九三七（同十二年）年・51歳
「東京アマチュア・マジシャンズ倶楽部」に入会

一九三八（同十三年）年・52歳
エッセー集『日本への回帰』を出版。大谷美津子と結婚

一九四二（同十七）年・55歳
肺炎のため自宅で永眠